放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2016.1

No.25

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110

http://www.bpcj.or.jp/

TOPICS 今号のトピックス

■公開トークショー　第13回人気番組メモリー『NHKのど自慢』
■カンヌライオンズ入賞作品上映会&ACC CMフェスティバル入賞作品上映会
■「ヒロシマ被爆遺品が語る」8Kスーパーハイビジョンで上映&秋の人気番組展
■企画展NARUTO-ナルト-THE ANIMATION&公開セミナー
■第2回番組保存委員会開催、サテライト・ライブラリー&教育利用

■公開トークショー　第13回人気番組メモリー『NHKのど自慢』

11月7日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る公開トークショー第13回「人気番組メモリー」を開催した（共催・放送人の会）。今回は、2015年で番組開始70年目を迎えた『NHKのど自慢』を取り上げた。

[登壇者]　金子　辰雄（元NHKアナウンサー）
　　宮川　泰夫（元NHKアナウンサー）
　　荒木　利幸（プロデューサー）
　　徳永　ゆうき（歌手）
[司　会]　渡辺　紘史（放送人の会）

『のど自慢』の前身である『素人音楽会』の放送が始まったのは、終戦後間もない昭和21年1月だった。戦前・戦中ともに、放送で喋るのはプロのアナウンサーか専門家だけだった時代。素人の歌が電波に乗って流れるというのは画期的な試みだった。

金子 辰雄

昭和35年からはテレビ同時放送も始まる。宮田輝アナウンサーの名司会ぶりもあって番組は高い人気を誇っていたが、昭和41年に宮田アナが別番組に移ると人気に陰りが出始める。昭和45年から17年間司会を務め、「ミスターのど自慢」とも呼ばれた金子アナは、「名司会者の宮田さんの真似はできない。だったら自分は司会をやめ、歌の好きな隣のおじさんになろうと思った」と話す。緊張で歌詞を忘れてしまう出場者のために、休みの日を使って多くの歌詞を覚えたという。

金子アナが担当する際に、それまでの番組スタイルを刷新した。ピアノとアコーディオンだった伴奏がバンド演奏になり、ゲスト歌手2人が参加し、歌がそれほど上手くなくても客席を一番沸かせた人に「熱演賞」を出した。出場組数を30から25に減らした分インタビューを長くし、出場者の人となりや土地柄を伝えていくようになったのも大きな変化だった。

平成5年、『おはよう日本』で朝の顔としてお茶の間に親しまれていた宮川アナが『のど自慢』の担当になる。出場者が最初から最後まで舞台の上にいる現在のスタイルは、この時代から始まった。「前日に出会ったばかりの出場者は、ほんの1日で旧知のように仲良くなっている。舞台袖のモニターで他の出場者の鐘に一喜一憂している様子を見て、その“仲間らしさ”みたいなものが出せないかと考えた」と荒木氏。出場者の組数も、更に減らして20組となった。海外での開催が始まったのも宮川アナの時代で、第1回目は日系人の多いブラジル。「3500人の超満員だったが、電源のパワーが足りず、真夏なのに冷房がつけられなかった。40度近い汗だくのホールでも、『演歌を歌うなら和服』と振袖を着る女性も多く、胸を打たれた」と懐かしんだ。

徳永 ゆうき

徳永さんは、高校2年生だった平成23年に大阪で開催された『のど自慢』でチャンピオンに輝き、翌年のチャンピオン大会ではグランドチャンピオンの栄冠を手にした。「家族揃って演歌が大好き。友達に誘われて予選会に行ったら、僕が受かって友達は落ちてしまった」と笑う。「予選では、バンドの生演奏をバックに歌えたことがものすごく幸せで、それだけでもラッキーと思っていた」という一高校生は、この『のど自慢』がきっかけでプロの歌手としてデビューすることになる。「グランドチャンピオンになると、応援の家族もステージに上がれる。当時90歳だった祖父にステージに上がってもらえたのが、一番のおじいちゃん孝行だった」という。

『のど自慢』は、抽選で選ばれた250組が、放送前日の土曜日に予選を行う。予選の順番は歌の題名の五十音順で、1人あたりの持ち時間はおよそ1分。芸能番組のプロデューサーらが審査員となって、本選に出場する20組を決定する。翌日の日曜日は、午前中のリハーサル後、昼の0時15分から生放送で本番が始まる。「土曜日までは、予選の250組とスタッフが顔を合わせたことがないゼロの状態。それが、たった二日間で番組ができあがり、ドラマが生まれてしまう」と渡辺氏。荒木氏も「生番組で、出演

者が直前まで決まっていないのは『のど自慢』だけ。当日、予選の250組が会場に来なかったら番組は成立しないという奇跡的な番組」と言う。「出場者にとっては、選ばれた翌日には全国放送で歌っているという嵐のような2日間。けれどその勢いがとても大切」と宮川アナ。土曜から日曜への短い時間で一気に盛り上がるそのスピードが、独特の高いテンションを生むという。

番組スタッフは、本選出場者1人1人にインタビューをし、本番で歌う順番を決定する。予選での様子から“合格候補”と思われる出場者を、メリハリをつけながら並べていく。とはいえ出場者は皆アマチュア。予選ではいい調子だった人が本番では緊張のあまり声が裏返ったり、歌詞を忘れたりもする。宮川アナは「司会としては、5番目くらいまでには最初の合格の鐘がほしいが、なかなか鳴らず、ゲストが『合格者はないのか』と怒り出す回もあった」と振り返る。金子アナも「緊張で歌詞が出にくい出場者には、近付いて合図を出したりもした」と笑った。

初対面の出場者が仲良くなり、同窓会として集まるケースも多く、中には出場者同士で結婚したり、離れ離れになっていた兄弟を番組で見つけ再会できたりと、番組をきっかけに様々な人間ドラマが繰り広げられてきた。「歌の番組ではなく、人と人とのふれあいの番組だという感じがしてならない」と金子アナ。荒木氏も「自分たちも、歌番組ではなくヒューマンドキュメンタリーだと思って作っている。その人がこの歌を歌う理由や思いが、ほんの1分前後の歌唱時間で伝わってくる。歌の巧拙を競う番組ではなく、その歌を歌う人の、歌に対する思いを伝えていく番組だと思う」と話す。

宮川アナは、昭和21年の第1回目の司会を務めた高橋圭三アナウンサーの言葉が今でも忘れられないという。「『人が大きな口を開けて笑顔で歌えるのは、平和な時代だからこそだ。そのことを忘れるな』とおっしゃった。戦前に入局した高橋アナは、大本営発表なども自分で伝えた経験がある方。その重みある言葉を胸に刻んで司会を務めていた」。“国民にマイクを解放する”という戦後民主主義の象徴とも言える『のど自慢』は、「明るく楽しく元気よく」というキャッチフレーズを掲げて、平和と共に70年間を歩み続けてきたと言える。

トークショーの最後は、徳永さんが新曲「夢さがしに行こう」を披露し、温かい拍手の中での幕となった。

■カンヌライオンズ入賞作品上映会

11月29日（日）、浜離宮朝日ホールで「第62回カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル入賞作品上映会」を開催した。この上映会は、解説付きで世界の優れたCMを見ることのできる数少ない機会であることから、毎年人気を博しているイベントの一つとなっている。今年は講師として、フィルム部門の日本代表審査員を務めた長谷部守彦氏にお越しいただいた。

はじめに長谷部氏より、同フェスティバルの概要、及び歴史等が説明された。また現地の様子として「広告関係者が自身の技術を高めると共に、自身を鼓舞する場」であり、なおかつ「ビジネスに繋がる非常に重要なネットワークの場を形成している」ことが紹介された。

同フェスティバルの中でも、もっとも古い歴史を持つのが「フィルム部門」である。しかし長谷部氏は「現在インターネットを通じて人々の心を動かし、共有される、そのほとんどが動画であり映像であること」や「フィルムを通して人々の心を動かし、ブランディングをするという動きが盛んになっていること」を考えると、実は同部門こそ「もっとも新しい分野」であると解説した。それらを踏まえ「伝統の中に埋もれない審査を心がけた」ことが明かされた。また「金賞（ゴールド）以上がその年の広告祭の価値を決めるものであり、世界の広告の道標になるもの」との説明がされた。「審査は世界の広告業界、フィルム業界に対する責任を負う」という長谷部氏の言葉は、そのまま同フェスティバルの歴史と影響力を裏付けるものとなった。

グランプリ作品をはじめとする入賞作品25本に、詳細な解説を加え上映。最後に長谷部氏が「フィルムというものの真価が問われている。フィルムでしか伝えられない、その深い価値を求め、今日も世界中で切磋琢磨し、技術を高めている人達がいる。フィルム部門は今後もさらに面白くなっていく」と締め括ると、会場からは大きな拍手が湧き起こった。参加者からは「解説付なので深い理解に繋がった」、「字幕付で見られるのは有難い」等の感想が寄せられた。また中には「実際の選考過程を聞けたことが大変興味深かった」といった声も挙がった。参加者205名。

■ACC CM フェスティバル入賞作品上映会

12月12日（土）情文ホールで「第55回ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」を開催した。本イベントは、国内最大規模を誇るCMコンクールの受賞作品を、講師の解説付で視聴することのできる人気の上映会である。今回はフィルム部門の審査員を務めた岡野草平氏に講師をお願いした。また今年はテレビCMの紹介に比重を置いたため、テレビCM部門に該当するフィルム部門Aカテゴリーの受賞作を重点的に上映した。

前半はラジオCM部門のゴールドとグランプリ、及びフィルム部門Aカテゴリーのブロンズとシルバーを上映。テンポよく流れるCMの数々に、会場からはたびたび笑い声があがった。後半は岡野氏にご登壇頂き、解説を交えながら、フィルム部門Aカテゴリーのゴールドとグランプリ、及びフィルム部門Bカテゴリーのゴールドとグランプリを上映した。これら上位受賞作品の解説に関連し、岡野氏が展開した「CM制作の裏話」も好評を博した。たとえばテレビ局に「考査」という制限がある中で、いかにCMを制作するかに話が及ぶと「制限があった方が刺激になる」と説明し「表現規制を逆手に取って、アイデアが生まれる場合もある」ことを明かした。また競合商品があるCMの場合は「互いが切磋琢磨し、どんどん面白くなっていく傾向にある」ことも明かされた。CMプランナーならではの貴重な話に、来場者は熱心に耳を傾けていた。

最後に今年のフィルム部門Aカテゴリーのグランプリ作品・東海テレビ『総集編～戦争を、考えつづける～』について岡野氏は「制作費をかけた数々のフィクションCMを抑えての受賞」であることに着目し「ドキュメントの持つ力が、フィクションに勝った」と評した。また近年盛り上がりを見せる、WEB上の映像広告・フィルム部門Bカテゴリーについては「ムービーの持つ力が、今一度示されている」との解説を加えた。来場者からは「この上映会を毎年楽しみにしている」や「講師からCM制作の裏話を聞けたことは大変貴重」という感想が多数寄せられた。中には「家ではなく沢山の人と一緒にCMを見るという体験が面白かった」といった声もあがった。参加者182名。

■終戦70年企画「ヒロシマ被爆作品が語る」8Kスーパーハイビジョンで上映

今年は終戦70年の節目の年であることから、NHK広島放送局と共催で、11月14日（土）～11月23日（月・祝）の9日間、『8Kスーパーハイビジョンパブリックビューイング　～ヒロシマ　被爆遺品が語る～』上映会を放送ライブラリーの9階情報サロンで開催した。

上映した番組は、NHK広島放送局が8Kスーパーハイビジョンで撮影した被爆関連番組の「被爆遺品が語る」、「原爆の脅威　熱線と放射線」、「原爆の絵」の3番組のほか、超高精細映像と3次元立体音響でNHKが制作した「絶対体感 宇宙」、「第65回NHK紅白歌合戦」、「長岡まつり大花火大会」、「ソチ五輪 フィギュア 羽生結弦SP」の合計7番組を使用し、会場に8K上映機材と22.1ch音響機材を持ち込み、85インチの大画面でリピート上映した。

会期9日間で1,858人（1日平均206人）の来場があり、来場者からは、「とにかく映像・音声ともに素晴らしい」「原爆の悲惨さを改めて痛感した」「子供に戦争やヒロシマの話を8Kの綺麗な映像で伝えることができてよかった」など大変好評で、8Kや被爆関連番組への関心の高さがうかがえた。

■「2015 秋の人気番組展」

10月16日～11月23日、地上8局、BS7局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催。各局の新番組や人気番組のポスター、台本、関連グッズ、セット模型・デザイン画などを展示した。校外学習の小・中学生ほか、来場者から「テレビの情報をたくさん知る事が出来て良かった」「各局テレビ局の注目される番組が分かった」「セット模型や図面など、ほかではあまり見られないものが見られて良かった」「春と秋、毎回、楽しみにしている」など多くの感想が寄せられた。

また、10月31日には、tvkの『キンシオ』でお馴染みのイラストレーター、キン・シオタニ氏のイベントを開催。トークを交えながら、ライブ・ペインティングを実施した。

■企画展NARUTO-ナルト-THE ANIMATION

12月4日より、人気アニメ「NARUTO-ナルト-」の歴史を紹介する展示会を開催（2月11日迄）。年表やキャラクター紹介パネル等で、「NARUTO-ナルト-」の世界と魅力を紹介している。また絵コンテ、アフレコ台本、美術設定等、アニメ制作に関わる資料を多数展示し、普段見る事の出来ない「アニメ制作の裏側」も紹介している。さらに、海外で販売されたDVDやグッズ、及び海外イベントの写真などで、その世界的な人気ぶりの一端を伝える。

特にアニメシリーズの歴史を辿る展示コーナーが好評で「放送当時から見ていたので、とても懐かしかった。」や「見始めたのが最近だったので、昔のストーリーを知ることが出来て良かった。」等の感想が寄せられた。会場では等身大のキャラクター立像と一緒に、記念撮影をする熱心なファンの姿も多く見られた。来場記念のスタンプ、クイズ等、様々な要素を織り込んだ展示内容について「NARUTO-ナルト-の世界に入り込めたようだった。」という声も聞こえた。

■第2回番組保存委員会開催

11月18日（水）第2回番組保存委員会が開催された。

◇副委員長の選任
委員交代に伴い、佐藤公委員（NHK知財センター長）を副委員長に選任した。

◇平成27年度保存対象番組の選定
テレビ番組1,096本を保存対象番組候補とすること、ラジオ番組は各賞受賞番組を中心にリストアップ済みの127本に、11月以降発表される受賞番組約200本を追加して選定することを諮り、了承された。

◇基本協定書及び保存番組複製基準の改定について以下の通り報告し、了承された。
第1回番組保存委員会（5月13日開催）においてとりまとめをおこなった「ライブラリー業務に関する基本協定書」及び「保存番組複製基準」の改定案は、第1回理事会（6月5日開催）で審議され、原案どおり承認された。理事会の承認後、日本民間放送連盟、NHK、全日本テレビ番組製作社連盟に対して、改定案の検討を要請した。

◇NHK広島放送局でのNHK・広島民放局合同上映会について報告し、了承された。

◇全国展開推進部会設置について報告し、了承された。
サテライト・ライブラリーおよび教育利用について、更なる充実策を有識者の提言をもとに進めるため、全国展開推進部会を設置し、年度内に4回開催する。

■1月の公開セミナー

1．ラジオを楽しむ！～ラジオの力、音楽の力～
日　時：1月16日（土）13時～ 16時半
会　場：遊学館（山形）
協　力：山形放送
登壇者：伊藤和幸（報道制作局 制作部 次長）
　　鈴木啓祐（報道制作局 報道部 統括部長）
生演奏：フォークソンググループ 影法師
司　会：石井　彰（放送作家）

2．名作の舞台裏「外科医・有森冴子」
日　時：1月23日（土）13時 ～ 16時
会　場：イイノホール（東京）
共　催：放送人の会
ゲスト：三田佳子（出演）、井沢　満（脚本）、
　　石橋　冠（演出）、川原康彦（制作）
司　会：渡辺紘史（放送人の会）

3．制作者に聞く！「ぶらぶら美術・博物館」
日　時：1月30日（土）13時半～ 16時
会　場：情文ホール（横浜）
ゲスト：山田五郎（出演／評論家）
　　佐藤明香（制作）、藤好　耕（演出）
司　会：ペリー荻野（コラムニスト）

■サテライト・ライブラリーおよび教育利用

サテライト・ライブラリーの運用については、8月21日から諫早市諫早図書館で脚本家・市川森一氏が手掛けたドラマ番組16本、9月1日からは広島平和記念資料館で被爆・平和関連番組8本をそれぞれ館内のパソコンで2月まで個別視聴できるようにし、11月末までに諫早が125名、広島が41名の利用があった。また、今年度で4度目の利用となる市川市文学ミュージアムからは、現在同ミュージアムで開催中の企画展『山田洋次×井上ひさし展』に関連した番組上映会の要望があり、2月上旬の実施に向けて手続きを進めている。

また、大学での教育利用は、2校から今年度後期の授業での番組活用の要望があり、ひとつは3年目の利用となる長崎県立大学国際情報学部情報メディア学科「映像研究」（村上雅通教授）の講義での上映とPCルームでの講義前後の学生による個別視聴で3番組を活用、もう一箇所は、今年度がはじめての利用となる早稲田大学の教育学部「広報関係論Ⅱ」（総合学術院・伊藤守教授）で、前校と同様に講義での上映とPCルームでの講義前後の学生による個別視聴で5番組を活用。両校とも現在利活用中である。